新拾遺和歌集

上之二

853
166

類　和歌

函號　二架　七八

書名　二十一代集

冊數　五六

第七一三

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

新拾遺和歌集巻第六

冬哥

弘安元年百首哥奉りける時

前大納言為世

古 業平

[illegible]

[illegible]

一條内大臣

[illegible]

百首哥先されしついくまおなし[illegible]

御製

渡邊千秋藏書

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

ふるひし秋の別乃涙よりあへぬ袖時雨なる

題ふ初　法里御製

雨きのやよそきぬきとりと書法をてゝ時雨

大蔵の名家

木ぶちるむへ山風のおしより時雨になりぬ嵐の深雪

百首奇事里し時々雨

お大納言公蔭

いうけるゝ雪のゆきれ定なき時雨を風のこゝろなりけり

文保三年百首一奇事なりけるに

六條内大臣

吹をとる風のまくふるうれ雪れりき明る山を時雨ふるしと

嘉元百首奇事なりける時々雨

昭慶門院一條

しゐんくに雪のうさ立山乃とに風を志るゝとり時雨かふ

中納言為教

吹よりる風のひきれ深雪やしけしやもらふ時雨なるらん

元弘三年立后屏風なり

正二位隆教

みを山ハ時雨ふるしかくられもつとの桂原雪かくらね

前大納言為世家にて時雨をよめる

従三位為理

浮世をさらひもしそぬ山風に立ちかへりしかむ時雨かな

冬乃前れ中に　近衛関白前左大臣

むらせ三室の山も冬さぬとあらるゝ見るより降さられ家

文保百そ奇なりける時

三条入道前太政大臣

山風の吹に雨をせてさゝめるく木の葉さへ降神無月かな

後撰

鄙しらす　権大納言房経

どくしの吹ゝる風乃ふかん木をもちらぬ庭の和葉を

寶治二年百そ歌なりける時落葉

冬きてはさゝめるおしの山かせにつきて木葉の山ゝぬ日はなし

古

伏見院御首分申しけり

山階入道前左大臣

永福門院

山ゆしと冬ゆや告る物時雨庭の木葉に雨をいれて

題しらす　前大納言良冬

吹ゝしらるおしの雲ぬらきゝ雲に時雨をきゝへて山る草葉

権大納言公明

むら時雨者を拂して通ぬなり木のそ吹まく岩の麓に

伏見院御製

拾遺
あるきの下やまうらぬ
しいまをはらるの れ
もこほしくるきふる

うきてのたまりのむしろ時雨かなりもなくかけ時雨なり
家は五十首奇よりこ侍ひろは朔時雨
二品法親王覚助
未ぶらう朔をの風やはらふん時雨はなわぬうきやこの宅
たいしらす
如願法師
しかるきれと山の紅葉ちりたてさひしき峯は降時雨かな
弘安元年百首奇なりかな時
権中納言公雄
以月のきてやもてぬう紀雲のあたりの宅はなほ志れて
冬奇代中身
皇太后宮大夫後成

うちしれ人の袖をもぬらすかな宅りやはふは枯をこふらん
後法大寺左大臣
きく人の袖さへぬ是ぬ未紫ちり吉はしられはなかふのこかな
家集云 よりれ此雨のひとしちらふ
ちりすきは人あるるくさひし
赤染衛門
いとしく袖ふ衣のひとり袖はたらくたりの降時雨かな
かくふもわらし 家
弘安八年八月十五夜 亦首奇なりかな時時雨
九十 後宮多 弘安十
鷲の夏
お大納言為兼
夏河まで取れ時雨のしるひきてさむる様は青海さう あり
鄭しらす
後法性寺入道前宮白太政大臣
ぬとろりを未紫の意れなりかせは明なり夏の限なし雨

子しかまてとめし猶のおほく庭の落葉とぞなりにける

陽子内親王家歌合

三条右大臣家屏風歌

貫之

家 六
山ちかき梢をこしてあれわたる瀧のおとさへきこえてぞみちたる

殷富門院大輔

水のうへに風もよるらし大井河みちもとむなく波の白糸

七十二白河
嘉保三年大井河行幸の日よめる

中納言経家

大井河今日の行幸に紅葉見て流れしきえぬさへぞかはれける

寛治五年十月白河院大井河御幸せさせ給うて落葉満水といふ事をよませ給ひけるに
七十三堀川 寛治七

權中納言俊忠

大井河水なきまでも見えぬまでちるもみぢばのうへにふる水

亭治にはかりて侍りける時よめる

躬恒

家 六
河上に時雨のみふるあじろにはもみぢさへこそおちまさりけれ

貫之

家 六
落つもりの紅葉をとればいとど世の林のこずゑはあらはなりけり

寛平御時の障子の歌

家集云延長二年ひろのおほいとのの北のかたの御屏風の歌十二首
右ち名家の中よしらのけふの言あり

後撰恵二
讀人不知
[illegible]

うち山の嵐に[illegible]
祐子内親王宮治におりしまし[illegible]
に[illegible]
如寂法師

神里月朝日の山もうち志くれ今やもみちの錦をかけん
[illegible]
祐子内親王家紀伊

君ゑ[illegible]ハ朝日の山乃紅葉[illegible]
文保百首[illegible]
前中納言雅孝

[illegible]
延喜十三年の菊合に
是則

六 さくの花冬乃野風にちりもせて今日まで[illegible]
家集不載
躬恒

家 六 菊れ[illegible]
建保[illegible]年内裏[illegible]合に冬山霜
信實朝臣

[illegible]
後[illegible]十首[illegible]時夕寒草

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

中納言為藤

万花家集不載　雲葉　文永十七

櫻井の河原の千鳥なくなるにいさりゆきは月もさえわたる

嘉元百首歌奉りける時千鳥

今出河右大臣

夜されはさほの河風さゆる夜のふけゆく月に千鳥なくなり

おなし心を

法皇御製

鳴海かたわたる千鳥の鳴こゑもうらさひしさは暁のそら

暁千鳥といふ事をよませ給うける

後二条院御製

浦ちかくわたる千鳥も声さえて霧のたえまの有明のそら

文保二年八月常盤井仙洞にて影供の時人々

人数をさためて哥つかうまつりけるに

正二位隆教

秋はや浦なるゝし夜さむみくらしに鳴千鳥哉

同心を

中務卿宗尊親王

更ゆけは山おろしさえてさゝ波の志賀の浦わに千鳥鳴なり

湖上千鳥を

中納言為藤

夕千鳥ハをそろの月もあかぬ鏡の山風けにすくなれ　不審

題しらす

源義高朝臣

鴨鳥のかよひちこそたえぬらしひくしもの池乃氷る

万十四
山さかへにわたるあきさを
後けしてつゆかたるも
ちふくたりか
みち取沢尾の気まツ
尾まて山え紀尾の
あこるとしいら
万九三気末枝には
つえてふるにほと
もつしきと

夫木十七
久安百首 所可
崇徳院御製

[illegible]

あし鴨のたちふつたさに浪こそうつ毛の霜や積らんらん
崇徳院御時十五首歌より
八条前太政大臣

取もすゝ鴨のうハもをたらふ水にて夜霜の玉よりあらん
家五十首所よりん侍ひるに池水多
入道二品親王道助

須ひく池のあしさを立鴨の氷にはうる詠もたるなし
位三位行能

中くに霜取の夜やさむりんこれりにうる池のをしも

当兄法親王家五十首所
前大納言澄房

[illegible]

霜にうたもはさゆる河鴨の玉もはつ底ハつらぬらん
百首所なりし時冬月
民部卿為明

さゆる取ハ夜ひしく底の霜袖乃氷に月やとるなり
れなし心を
信専法師

さえ雨さる袖の風をかしさて霜取の底に月をとる
元弘三年立后屏風に又節をとりませ給う
[illegible]
後醍醐院法製

新葉冬ニ亦載

袖ノ人ニ天津し女もさひ初よ吉野の夏れむすし後と

寛治二年百首奇まりける時豊明節会

従二位行家

催馬楽

みの山乃志ゝ拝いつよりかとよれあるかよ河ひたるよ

冬の歌乃中に　お大納言為家

取さむなる雲のあるを霞の上に月さえ行ふ雲の行

中納言為前神無月の比如白河にまゐりて人々

十首奇よませ給ける時河上冬月

前大納言實教

しやき洲ハこゝりもやして冬の上れ河高たく月そ高行

たゞしらす　達智門院

そのつゝこゝりぬむさもこゝりける月新さむき山河乃れ

祝日成光

三宿の名ハ乃こゝりて異津風あけぬの浦にこゝりる月け

お大僧正桓守ましめ給ける日吉社三首奇

今に冬月を　前大僧正實超

おうしや入海さむきさ冬れのお花乃波にこゝりる月け

湖邊冬月と云事をよみ給ける

僧正慈能

鳴の海やひしの山風さゆる夜の雲よりこゝりる月

百首哥たてまつりし時冬月

権中納言時光

さゆる夜の霜をかさねて袖の上にたれかハほさむ月の影かな

冬の哥の中に　按察使公敏

枯わたる草葉の霜乃白妙にやとりてさむき月の影かな

千五百番哥合に　前大納言忠良

とハれても清かりし霜のうへに月みけさむしとの藤原

永仁五年仙洞哥合に

昭慶門院一條

枯はてゝ冬ハ野原の霜乃上に秋みしよりも月そ秋にかハらぬ

續後拾遺冬

芬陀利花院関白内大臣

[illegible]

文保百首哥たてまつりける時　権中納言公雄

晴やらぬ夕ゐる雲の山のはにかけさへさむる冬の夜乃月

題しらす　左近中将善成

さえわたる風にくもらぬ空よりも夜はの山の端乃月

冬月をよめる　従二位為藤

林とも見えぬはかりに散はてゝつもりて寒き山の端の月

左京大夫顕輔家の哥合に

従三位頼政

久方の空さえまさる冬の夜ハ月乃光も霜とこそみれ

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

二水法親王 兄 助家 六十首 所ニ冬晴月

お大納言為世

さゆり花の宮けの宅に村雲をとらりてつまふ五明の月

中納言為藤家 六首 所ニ河氷

新河法師

物洲川ゐてこそ波のそれまゝにこほりて明りせの志りし見

百首所ニ附氷

左兵衛督為遠

さゆり花ハこゆるもたやし古 吉野河岩きりとほ水の白浪

文保百首所ニ年中ニ行ひ時

前大納言為定

立 古 ゆうかぜも中ゝえ手冬河乃右さふこゆり水の志り波

冬の流所ニ中ニ

院御製

谷河やむまふ水乃志るむまひ来れもやらぬ高もさむ

檀大納言宣明

高ゐてしあらしや松ニ結るらん河く波らゆり志り此辛崎

文保百首所ニ年ニ行ひ時

法二位宣子

流さ 記 くなる此落葉にむちりて 古 おとさへさむく河家水

西行法師人をまゝあて百首所ニ年ニ付ひ

小

お中納言定家

朝夕乃音ハ時雨のまかふれと雲ハ色つらぬかれけるかな

建保五年内裏歌合に冬野霰　　参議雅経

宇多乃野はやとかり衣さえくれてさへもさやかにあられふるなり

太神宮文十首歌に　　法眼源慶

む藻らからしれ雲の通ひ衣夕日もさむく霰ふるなり

文永百首歌めされける次に霰　　後宇多院御製

風さむみこゝえハ宮けに嵐さそひて行く雲にちるあられかな

文保百首歌奉りける時　　前大納言為定

庭の面に拡くのこれる色見えて見えてつもる白雪

雪乃歌とてよめる　　従二位為子

いとゝ又宮ハ絶も多かり人めかれ庭の雪

百首歌たてまつりし時　　前中納言

おほ大僧正賢俊

今朝もはれぬ池のおもにうすく庭のさむき雪

たゝしらせ　　法印長舜

宵のまに彩のさやけも奈残てふくれハしらかる雪にしも帰

伏見里宮といふ事を
後京極摂政前太政大臣
里はあれぬ宮のうちにもすゝ虫やかしもの葉はかれぬとも
建保四年百首哥に
前大僧正慈鎮
猶宮のかへとりの人ならてむかしをしのふ浦の蓬生
あはれしらせよ
中納言家持
ちは川宮代庭に浮くさきも秘めてひらくられん
好忠
神まもるたちならぬ宮となれいとふ人あらしみ山へかへさ

文保百首哥奉りける時
六条内大臣
ゆふへとも思はぬ山里になかれ川宮ゐ何となるらん
平親清女
梅もつるを払ひ志賀の原なる滝くあやめの日数のたれある宮ゐ
文保百首哥奉りける時
花山院内大臣
今はとてもみちし白雲つきて空しく久米の岩橋
宝治元年十首哥合に野外宮
後嵯峨院御製

万代六　松上雪を　堀川右大臣
いとゝまたかすみもかくれ松にふる雪はいとゝ春をもかくすらむ
武隈の松とゆふ人ゆるしてそゆきしうつもる

いとゝ又かすみもかくれて武蔵野やあまきる雪に曙の空

松上雪と　後山本前左大臣

花ならぬたゝひとやそん緑とて雪にうつもるゝ松のこすゑは　源光行

武隈の松のみとりもうつもれて雪をみきとや人にかたらん　源頼貞

水鳥のかもの羽山もしくれなる松の色紫も雪消なり（まつ羽よます）

嘉元百首哥中に雪

後常磐井入道前太政大臣

月つもる遠き乃とふ山のゆふ松のはひりとけたる嵐のふる雪

宝治百首哥めしけるついてに冬月　後嵯峨院御製

白妙のひかりそまさる冬の夜の月乃こほりに雪つもるらし

題しらす　後鳥羽院御製

かさしける袖もやとると払ふらん三輪の檜原の雪の曙（と）（万七）

百首御哥中に　二条院御製

冬の夜はさゆるまゝにも三吉野の山乃志ら雪今や降らし（古）

白河殿七百首哥に河邊雪

前大納言為氏

津の国の宮城をさしてみよしの瀧津河うちちるこゑの白波（内）

小大君集云 …
大井川…山風…
小大君集を他人の歌…
順集云 …

手束縒大井の家まて冬を令よと侍りけるに
三条院女蔵人左近
大井河そは山風のさむけさに岩うつ波を雪かとそみる
建保五年内裏歌合に冬海雪
参河内侍
こきいてゝたかしの小浜松も雪浪のあはれ宮の下おれ
道助法親王家五十首哥に
正三位知家
湊風はかれもみえて行波のよせくるみねの真砂路の雪
文保百首哥奉りける時

續後撰冬中
後鳥羽院御製
九重の…

津守国冬
吉野山宮たきへもまされぬ冬の夜は嵐八つらくとよ
寛治二年百首哥に歳暮
前大納言資季
ゆく年の押てもかへらぬ世の中にそのうへたにつもりしらなん
百首哥の中に
花園院御製
わかれしもいまはかへらぬ年なれと身ものこりて…
中納言になりて侍りける年元後節会にまかりせ
侍りける吉日社の五首哥合に
前中納言為定

くれぬまて今さしいれくことしかな月日のゆもしらさりし
藏薯花といふりまとゝ給ふ所
御製
いまはしらは年の薯とも掛くらしいたゝきなれたる
朝まつりと

新拾遺和哥集巻第七
賀哥
左大臣乃佐保の家にみゆきせさせ給ふ所
元正天皇御製
時
万八
たゝこそくきおとゝ
おとゝ
ゆきかきかきつゝ来もてつゝ行ふ宿八万代迄
長元四年九月上東門院住吉社に御うて
六十八後一条 長元九
させ給ふ時人々ゆかりのみ給ふ
法成寺入道お持段左段右下
君か代はなりて此橋のとしめよりの神さぬ所ゆ住よしの松
寺延久二年やれ橋のまつりに住吉にまゐりて読

栄花物語三十一殿上花見
くいんもくとあり
宮治入道冥白ちり
法成寺冥白八万寿四年
薨今本誤

御返し　　西園寺入道前太政大臣

君か代は八十嶋かけて治まれる波の音にも風そのとけき

弘安八年住江に御幸ありて御講述懐を

いふ事をよませられ侍けるついてに

津守國助

（新千一）神代よりかはらぬ松の神もありて千世のかひも見るめ（古今序）

松延齢といふことをよみ侍ける

権大納言公明

（万一）（九十七光明　暦應四）色かへぬ松はえやいく千世も君かよはひによはひならへん

暦應二年六月仙洞にて松影映池といふ事を

等持院贈左大臣

風かよふ松もうつりて池水のそこにも千世の数やしる

弘安八年三月従一位貞子か九十賀侍ける

る時讀侍ける　　為道朝臣

かはらしな君かよはひになからへて千世の始まれる

亀山院御時亀山殿に御幸ありて祝哥

延年といふ事を講せられけるに

後嵯峨院大納言典侍

君か代もちよをみゆきの跡そひて万世やせん

中院前内大臣

一百代の君のかさしにおをえんとおもひつゝ山さくらなる
二尺兌性法親王に八重桜にそへてつかはす
法橋彫昭

北院御室守覚 兼業
に二ぞとまりあり
又おほ彫昭とよく
うちし給へ西方あり
此集深きを

君のみんなとせの春をかさゝめへさためしとゝあらやへ桜かな
返し
二尺法親王兌性

今世始へきなりとさけ八八重桜かさゝめていとゝおもひ
元久三年正月高陽院殿にて庭花喜久
とし事を
前中納言定家

あらさ海の年ゝ子とせの春ゝ久をかねてみかきの花にうる
後醍醐元徳二
元徳二年中殿にて花契万春と云事を
言

勢ひ行ふ
今お河入道前右大臣

君のみめひさしかるへきまにあひて花もかつらす百代やへん
九十九 後光教 文和四 延文元年二月已後改元ちかへし
文和四年二月松有使色といふことをつかう後
法りをる
お系譜為秀

君のみやゝ子とせの春ゝ花乃久に十ヶ月まてよなれんと
光明 康永三
康永三年後二月他洞にて松遊年友ゝ
云事を講せられけるに
照光院お関白左大臣

今ゝ留ともかさゝぬ君の友なれは松も花さく春やかさ
孫ん
入道お内大臣

よろつよのこやの山乃峯に雲はれて千世の秋とそかゝるらん

前大納言經顕

ひさかたの月やさかゆく君ならん十かへりの松乃花咲ほまれ

前大納言公蔭

松かえも八百万代の名に高き千世もかはらぬ君のよはひ

前大納言忠季

ゆくすゑをまもるかさしの姫小松ときはの君か千世をまもりて

貞治二年二月春日社に松久緑といふ事を講せられし時

前参議實名

君か代は千世のかすにも松のみとり乃色のふかさに

藤原雅家朝臣

いく千世そみとりをそへて枝しけき君かゆくすゑの松
竹有るのためしつくに

花園院御製

よろつよの尾上の松に吹かせは世を万代におとつれやする

左兵衛督基氏

ゆたかなる松を吹風のいく万代のこゑ

文保百首歌奉りし時

前大納言経之

君か代はこやの山の松に八千世ふるまてかはるましき

新後拾遺賀
法印定為
[illegible]
[illegible]
下句は

百首歌めされし時祝云

御製

せをおさめ民をおさめむ波あらはえはひつきの末もかきらし

[illegible]持院姫左大臣

[illegible]の海なる川乃名も我君の代を杞さまる姫なりけり

後醍醐二年

正中一百首歌めされけるついでに

後醍醐院御製

[illegible]の海おさ満りぬらし我国のやまとしまうに波しけりなり

建仁三年十一月和歌所にて九十賀給ひけり

時つかうまつりけり

皇太后宮大夫俊成

百ゝ世よちかく人をおほかんの万代ふへき君か御代には

正三位經家

和歌れらしなよる年なるをとりそへしるし代れらはしまむらくの

おなしき時拾ひ世なる法服のけさはをさ地まこめ

へき歌召れけるに

後鳥羽院宮内卿

なるへてと物やられしき君の波やちよをかけく君につかへ

此歌を賀をされむとてめされてさいりて終取

見侍てなへくなるぬこちの面目いみしくおほえ

なるおまりに洗とめてまつりしまる

建礼門院右京大夫

君か代はかすもしられすつきもせす九かへりの十乃枝くさ

返し　皇太后宮大夫俊成

亀山の九かへり乃千とせをも君か御代にそへゆつるへし

（白河）承保三年大井河に行幸の日よめる

式部卿敦賢親王

大井河みゆきやまさるかめ山の千世代けふるみゆきをそ見る

延保六年中殿にて池月久明と云事を講せられけるに　衣笠前内大臣

君か世のためしにそめる池水に千よを経る秋の月影

従三位行能

汲流す池の心に見えてる月もくもる時なく万世や見ん

信実朝臣

わきてけふみなもにうつる池の名を月まそみえて百代乃秋

建保二年九月月契秋と云事を

前中納言定家

君か世の月と秋とのちきりをやなかきためしの千代の白露

東三条院石山に詣てゝおはしましけるに秋

のはつかた日ころこもらせ給ひて之

里そへむく前にみゆるなりけり

権大納言行成

玉葉秋下
園融院の石山に詣てはへりける時九月晦日為上人ともにて得侍りて
　　　　前大納言公任
紅葉するころ…（頭注、判読困難）

君か世にあひみへき秋なれと今の名残をいかにとかしら

後宇多院御製の比昭慶門院に奉りて
人こゝに命をつくへきよし仰られけるによみ侍

前大納言実教

白露のめくみにもれぬ言の葉をけふしるしは君か世の数も

元弘三年立后屏風に

後宇多院宰相典侍

咲そむる籬の菊に露ふかくちよを世をへむ幾秋そ久しき

崇徳院位におはしましける時法金剛院に
行幸侍て菊契千秋といふことをよませ給ける

御製

三条内大臣

君か世の数にはかけし摘そむるはなさく八重もかきらさらまし

百首哥たてまつりし時庭竹

前関白左大臣 九条

紫の庭にみとりの竹の色そへて千世をかさねて世の呉竹

花園 正和五

正和五年内裏造営の比竹契遐年と
いふことをよませ給ける

後照念院関白太政大臣

世々をへしみかきの竹の種なれは末も久しき世の色にかはらぬ

後光厳

延文四年庭上鶴と云事をよませられける

内大臣

北き海はるや井の底よりゆかり心をけさみなまつの緑かな

人のようませ給ひけるにうふきぬつかはすとて　辨乳母

家集　女院のうふやしなひの人々にをくりける

露のみをそらさへしらすおいはてぬ世をやちよにと祝ひきこえん

祝の心を　源師光

ひろ田よりをせと逍ても露も君かよはひを思ひしらるれ

十二月晦かたに藤原基俊の子法師と云ものの

よろつよをまちぬる人も見つゝそいひつくるしもあるか

権僧正永縁

新勅撰賀　太宰大弐重家

もゝ田の子もいはひのいのちよに

続後撰賀　大納言成通

ちよ田老いのきはやしの月をも

まことつきせぬほとみる世のはしめとは君そいはれん

返し　康俊

百世まて君か代に見へくますかゝみ君かみけにはなれしとそおもふ

百首歌よませ侍りし時祝の心を

権大納言義詮

わか君は人をかゝみとみるへけれはをろかならて我世もつくさん

題しらす　法印定憲

わか命けふこそ二度玉を見てしもあけき世のはしめなりけり

貞和百首奉りける時

入道二品親王法守

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

天地とともにふひさしき夜鶴の屋あり此代にあふかうれしさ
知元百首奇しくまつりぬ時
津守國冬

まり君はをのゝえ打しきをへて民の七世乃末にあふすで
洞院拾政家百首歌に祝
源氏長朝臣

君ゝ世はまさあし原のあきはらふみちひり塩のつきしられ
後三条院此時大嘗會備中國哥
藤原經衡

たゝかふれ今行末をなりふへきなりおの村乃ちきためしに
堀河院御時大嘗會近江國哥
前中納言匡房

ぬゝこ山岩根に相ふつさり来れ此葉へも世にて万代やへん
寺倉院此時大嘗會備中國哥
法輔朝臣

家集不載
なりなきまさの那へ乃玉日乾くさすや君のありかゝれ
おなしき此屏風哥
なりしきこゝろ里なれよをとてふ也月てうきれの海に釣舟
後光嚴代
今上御時大嘗會此屏風より
權中納言時光

呵成えくちこの村人いくちこひとれともつきぬ所るへたらん

文保百首奇なりなる時

前大納言為定

黄昏のたゝも今しうさくえけ遣よろ川をもてぬ

君かめくみよ

新拾遺和歌集巻第八

離別哥

こ成(注)きにかひなをもむきけり人なり

衣笠前内大臣

立かりけと名殘をおしむらんこころハ人なけれやいなく

故原光後朝臣あつまよりのかりなる時

中務卿宗尊親王

こゝせまてなれしこへしそうわけ遣せめて別のおしき(と)餘

ゆつまへ川人よりはなしなる

故原淳信朝臣

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

千載別
成務法師入唐
[illegible]
成務法師母
[illegible]
古て
[illegible]

成務法師もろこしまやうりろ時ちみ侍ける
成尋法師母
もろこしへ行人よりもそまりてかゝきたひ申事ゆゑ
遠き国へまゐる人状ハ必ゆゑへさ申きれハ
控僧正道我
いきりあり命なりせハめくりあひん杖もせめて祭をかまし
人をさうひく難波は月見にまゐりて暁のを
里をうは前刀納え実但すと塩湯あこて侍所
まゐけりの名称をたさひ久る時頭阿波のうへの月
を後しゝ難波江のあしまけ小舟こさやまゐれん

とゆけまハ返しけり
前大納言為世
漕いつるあしかをみるとう又名称をとめてさりけるに
前大納言実教
波のうへ乃月れこうもハ難波江の何しかも舟杖やさりん
大峯の吹こしと云宿はとまりあひさりまゐ山
伏さ記さりて立けましん
大僧正行為
又何とあひこんことをきゝめてか寝のうさ方をまゐて行らん
与君後會知何日といふことを

後拾新二十一名
[illegible]

土御門院御製

別の心を

たのめずくはらの命をしらずとにたのまれぬ[illegible]ぞ

大僧正實伊

そのかみはよこれはある世のおもかげもみえずふさへての春[illegible]れは

前大納言為家

めぐりあはむ心ちはかはるそれ[illegible]りや山を[illegible]は[illegible]らん

為円法師みちのくのかたへまかりける時別れし

[illegible]人[illegible]よ[illegible]ね[illegible]は

俊恵法師

これはまたよ[illegible]る人さへ行末をかぎ[illegible]くさでこそあるらるたのみし

[illegible]

小侍従

[illegible]

後徳大寺左大臣太宰大弐[illegible]

にまかりて女房の中より秋[illegible]の月[illegible]

おぼえて暁[illegible]小侍従[illegible]

出くわ[illegible]ける[illegible]にありて[illegible]を

藤原経衡

此哥ハ新古今ニ[illegible]此歌ハ[illegible]の人[illegible]

[illegible]

源頼康

[illegible]

藤原基世

[illegible]たのしき

わらはしことしも萬ぬ君の方れおとろへ海さりひ家の面
古堂
荷原景澄あつまに下侍し時説の宿へ此の
もし侍まり　前大納言為世
玉の葉にもけぐといみよ濱山志てふこころまかけハ
なりとも

彰拾遺和謌集巻第九
羇旅哥
訊しらす　よみ人しらす
ことにしく家やいつこ志てやすらひく山を越て来ぬ
人丸
むこ藻かるとし海を通て夏草の野鳴のさ紀に来をつき
亭子院なにはにみゆきせさ所給うぞる時よ
みゆきの　貞数親王
君をこめ流のむ志てこれのを海行通りしおりてひろん
題しらず　讀人志らず

万十二

冬坂とうりおくこれハをはの海にゆふ花に浪立わたる

千又百壽奇合に　大納言通奥

とまりすりをし海か磯の浪枕さしうハ嫌かれんうきれ漁風

猿泊　中納言為友

とりいくか浪の枕にあけられく山の端にぬ月紙さるらん

四羇猿の心を　如願法師

和田の原ハ十時かけて志るへせよ遥にかゝりふおきの釣舟

古

白太后文太史後成

まこゝろ河ゆるへ却りふ夕葉ふおきをそふ家をやこ一鳥ふ

百そ奇めされし時そに羇猿

御製

古

浪るくこゝろ河ゆるへ故ふ名をしたひて

羇中書とゝとを　お大納言忠良

まむきふかり庵の床れ杖の神寝やハぬしもなれの見

猿乃仙蹟　今お河院を浮

仍なれぬ元なれあり歴の寝をて志ゆるに猿のよりもへに

万二

永仁元年八月十五夜坂宇多院に千首奇

九十一伏見永仁六

まわしに杖猿と云事を

お大納言為兼

所所をしれんとてもいくさん猿ねの秋乃聖の松

為道朝臣

杜の夜もあまた猿の乃事桃家より家にむまひたへて
百首奇なりし時罷椋

古うつ

桂大納言義詮

大江山あと行末もさひ衣いく野乃露りはしりうらん
罷中野といふ事をよさせ給ひ

伏見院御製

露ふかき聖人のときこれかり桃かしなれぬ夜ハ菓も結ハす
歎しらす

前參議為秀

ハ河まそ人ハ菓のまくらの志ら露乃おくとハいたきおとハ志ハ
古 見ん

荷原宗秀

あつま聖の露にけ衣と夜さへほそやまに桃むまけん
元亨二年乗山殿にて題をさしりて奇つかう
まつりをうる猿行

前大納言有忠

郡をハ夜ふくおて金坂の関に浦さるゝ鳥のしかれ
歎きらも

按察使資明

開の戸もたやはりこの鳥の孫におとろきれていそく猿人
中園入居お太政大臣家にて朝猿行と云事
を

頓阿法師

あ山坂の鳥の孫に泣く成にけりあさ露ふ海あまの原

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

秋風ふく白川
の関にや

野旅　権中納言定経

たれか又露けき野への仮ねせん袖はつゆにとまる草の枕に

五十首御哥の中に羈中衣といふ事をよま

せ給ひける　後嵯峨院御製

命こそ草の花かり衣ぬるゝともおもはぬ旅のうき

寄光院親王家五十首哥に旅　大蔵卿有家

旅衣たちいてし日も着なれたる宮城野の萩か花ずり

旅寄に　藤原行春

なかはとも花のうつろふ秋をしもかはらぬ武蔵野の原

拾

たよりあらはいかて都へつけやらむ

けふ白河の関はこえぬと　兼盛

東のかたへ修行し侍りけるに白河の関にて月のお

もしろかりけれは関屋の柱に書付侍る

西行法師

しら河の関やを月のもるかけは人のこゝろをとむるなりけり

元亨元年八月十五夜内裏の哥合に関月

丹波忠守朝臣

よひ〳〵そ月に越わつる秋風の音のみそする白河の関

能因哥

羈旅　後九条前内大臣

秋をまつとしらぬ門の雲こえて思ふもとほし旅のやまさと

東へ下りける時よめる　祝部成茂

あしらはぬ山路乃月に嚴てしてあくれハ袖に霜を拂ふ

夕猿　善了法師

秋ノ末ハ月にやこゝんあひ衣日をゆつくれ乃さやの中山

猿の定いく夕雲に待あかく山乃たかゝ月をこゝらん　兼好法師

新しらす　前中納言為相

猿人ハまたあやらぬ閑の戸に月うさ記ふ的の定

我ならぬ人もやうゝ猿のしてあ明乃月に拂ふらん　後光明峯寺お拾段左右

兼来田氏忠

秋葉秋下　権大納言公夏

秋のよ秋の明ぬ[illegible]

秋古今猿　源家長

[illegible]

ふり捨て誰ゝハおとん玲瓏山せきやハ秋中の月もとり　中納言家持

猿人のよこなりふせる山にて月にもいく秋ヨリ[illegible]

猿乃御所中に　後鳥羽院御製

きゝぬたに老ぬしさ東路にすゝむる月の[illegible]

伏見院法製

松ノ孫のあしの枕夢たえて孫光の山に月そうさ

元久元年七月宇治御幸の時の文首乃奇

よ　六条入道お太政大臣

いかりさしたる山ノ原のかり孫にハ桃になるさ御しの[illegible]

玉葉猿　中原師宗家臣

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

和奇所六首 奇合に猿月聞鹿

宜秋門院丹後

松の緑の梢にしられぬるくれ古木のさ乃月を袖にうつ

鶴しらす

源頼貞

かりなきて朝風さむしなつり我なりしかりや衣うつらん

寅治百そ奇に

正三位知家

今取りやさのをかへ乃松風にさて葉かりしき袖にも絡ん

題しらす

清市長舞

さ桃取事の古衣袋へさ花を夏にもうとに紅葉なりし

源業氏

万三

秋風のさきを取けす
さのうを心に神しんきとに
きぬうさすしを

月九

やまとまをきくしきゆくさ
おほしのゝ竹葉かつらしき
いまはさきりとを

此歌小竹葉の小の字
落ちる也

後拾遺 源理大夫所雪
かつらを神のうつれの
出るさま 下旬日

玉葉旅 肥後
旅をきくしき神のこ
法ゆりきまおりいさし
てをあらへりけり

葉桃落うちそらふすのまゝに源のうしく取りの衣手

羇中夏

前大僧正實超

古へりかりふさてちハゆるさ明ん猿の乃取事桃夏の

猿乃心絡

左京大夫野捕

葉満ゝ神のこゆるゝ猿しかもしひさらん事れくや

あつきに下せる時やとれりける家に男ハ多く

て女ゝうわおわと事ていひつかりしけり

源仲正

君さゆる猿の度のさひしさ絡いかにとしたも同人も絡

逸し

よみ人しらす

猿なるぬ我も衣をかうしきてしかひやまとしもいくしかへき
白河殿七百首奇に猿宿時雨
前大納言為家
かゝる衣古なるくきぬる猿鳥も袖ぬるせとや又しらんらん
霧猿枯を　お大納言為氏
里と河ほき山路のせゝはしれて夕日ふいなく林の猿人
冬猿　卜部兼直
しれつるせゝをこ山に分猿く宮にしらぬわしりし此間
宮の奇とてよめる　二条法親王兼覚
里をしらぬ猿そつかんかる宮にしらぬくやこゝん冬の山路

寒夷法師
古かひか猿ハ多代ひかるゝ猿なんたゝや宮源しさやの中山
猿業善を　大藤四隆精
かゝるさハ年さへくれぬ東路やかすとてしらし白河の関
為ひしらす　お大納言為家
猿しらもなるくきぬる八橋のむりしの路に袖もぬ進て
道助法親王家文十首奇猿春雨
源家長朝臣
宿もかふさ万三のわたりのさのこやハぬ進てもゆかむ春雨
親しら須　よみ人しらず

秋葉旅 後人不知

たのめずく宿しなけれは猿の宮くるをたの頃まそ

源季賢

行蓋ぬこやに一夜の宿とひく那波の河のうれとや

お大納言為世よりまゐ侍し春日社所そ奇

奇中に

法印公順

とりよろはよそに成ぬ是かつらきや越しこ岡の嵐の白雲

百そ奇なりし時羇旅

右大臣

一所にをへてきたれり猿衣かさ明る山のやへ此ゆ雲

居明法親王家五十首奇に山猿

秋勅旅巳早

立かり又もやこしん峯乃雲あとも きこあぬよりも此嵐に

猿の行をよませ給うまる

花園院御製

太山路を冬こしくれて宿もなし雲ゆる嵐にと乗りも絲ん

入居二品親王當園

こやこ昔ふうつの山居おしまひぬ蓋をとる山陰にひに

あつさよわの小里を帯るみちにて

法印定盛

寂しけきさ葛の山をとなこそ思へまかるうつの山居

伊勢物語

さ東中山をこえ侍りて夢ゆく侍りれハ

平泉時

明ぬとて海もとの里ハおぬ道とまゝ穿ゑてささ敷の中山

たいしらす　性嚴法師

いたくまゝ宿をうしまし万岩山ふえかさ所り山ハ目ハ雲はり

洞院摂政家百首哥に

従二位家隆

万十五
大ともの[illegible]
[illegible]
[illegible]

桂田山ゆふあてくれぬ大とも此ら河のとまりに海や行らん

猿のこゑを　祝部行親

漕いそしみなとへてそて和田の原かさなりて白浪

貞和二年百首哥にてまゐり当り時

後嵯峨前関白左大臣

漕泉の行来へも志らぬ浪さらわみゆるこし海やとまり　知らん

元亨三年十月後宇院に十首哥をまゐ

せりに海邊旅といふ事を

前大納言為定

みきこうあのよりへ
[illegible]
[illegible]

わさの原おき漕泉のよりへなこ海士の住てふ里やとハまし

前元百首哥めされしついくに海河を

後宇多院御製

いかなしく人もなよいんまさの原海と風とのたよりなしす

保延元年内裏歌合に海上遠望

崇徳六

大炊御門右大臣

みまくせいことりの元に浪かけて三湖わもしらぬ氣おしにけり

猿の心を　二品法親王守覚

ゆしまれぬ　ここのうち風もおしてしらぬ波の表かな

洞院摂政家百そ歌あり

前中納言定家

中瀬ぬ演松の岩枕袖うちぬしくるうら波

百そ歌をかゝるに千鳥

前内大臣実

うとひくいく度過ぬ友子鳥あしの後なるのよ枕うきねに

入道二品親王覚　蓉家五十首哥に

橙信正果守

ふし鳴ぬおしの葉そうく澄風さむく吹夜の波乃枕に

前元百そ歌をかゝる時

贈従三位為子

月ふそきむかゝる和の夜中もまた刻ぬ猿の〇とすさの風

二品法親王覚助家五十首歌に猿酒

菅原基任

うち枕いかにさしめて夏もうきねにたるく人にとはや

万三

道助法親王家五十首歌より海猿

法印覺寛

夜ふ浪志ゝ津のうら此ゝき桃なるゝも波をかけぬよそ
たゞしら寸　平行氏

うき桃おひもたてぬ夏浪よりやそうつよふる波かな

桂大納言忠基

ふひ風きなれさる海士の釣さゝも波のうきねはぬるを

院三位成清

ゆゝへと海行ふ浪へうさ雲も雨になるこの風浪ふ人

法印源意

舩こゝめて明てく神のうら風をたゆさふ波の桃まそ
二尺法親王光助家五十首青に猿泊

大江茂重

どもさうふ雲のさまりの鶴風に古 都をなりにおけてゐる人

大江貞重

うりわけるおら緑なる此ゝまそもなるゝぬ猿に神をしる

太神宮哥合より羇中月

源兼氏朝臣

海ゝろまそ月をそこゝるゝ波のおしきゝ海へのよゝの
万一
より雅

法眼源兼

伊勢海や月にあり方しく須磨の夕秋もさむし秋の短風

羇旅を　　法二位家隆

とおりしかむ方ひはしらるゝ道具津せ夕立波の　あらさ須磨

新拾遺和歌集巻第十

哀傷哥

題不知　　人丸

家　菓の葉にをきゐる霧の消ぬまにかれとこゝゆることはたらなさ

日並　頃成　日垂皇子かれ給ひ時よみ給ひ

万二　久すれ　あり　夜ひるくあふきみし　只このみとはあれまくおしも

天智天皇かれさせ給ひ時よめる

額田王

万一　かくらんとしらしもせいたゝ家のこゝゆるとまりにしめゆいまりを

たいしらせ　　貫之

家 六
から衣きりきる糸は涙やあまされとかへくほころひ
ことにおくれて歎けれは輔親かもとへよみつかは
しける　重之

家
このたひはおくれし露もあまたありき思ひの草にはそとのこれ

返し　祭主輔親

新古之集不載
かりそめの別とおもひし草葉の露やまつけく疲れはてぬる

三条院かくれさせ給ふて後郁芳門院のみこに

道命法師

ありし日の山のはかるこれかるわかれやなかなからん

返しつらくを　藤原長能

新古哀傷
後京極摂政…

家
いにしへもあまたありけるわかれなれと人はおくるゝ事なかりけれ

四条宮一品へまかりける時閑山をと思ひ給ける
まいらせ又後れ給ひけるのちにほかへわたり給ふを
思いてゝ車をとゝめてつかはしける時よめる

新少将
待賢門院新少将

あま人は行ゑもしらすと思ふらむ世はうき浪にすきとめてまし

待賢門院うせさせ給ひて後すこしまかく
九月晦日中比かくれける

按察使公通

世中はさらにもいはし程もなく人もなかれとなに人は惜むやかりぬ

返し

城河

陽なく雪ふのくすを行まるて別し杜の名称と云へ

默しらす

お中納言定家

夕はみふむ明さ物を桂田河もみちなるて杜も一さ紀

鳥羽院かれさせ給うて御葬送の歌高

野まゆ云ゑさるにさいりあひくよみ侍けり

西行法師

こまひしてしひし里ぬ遠清しす君に松の名も多なりけり

八條院かれさせ給て後ほとなく又長花門

院うせさせ給ふをもとを鳥羽へまゐりなりに

讀侍ける

信實朝臣

しわけ別をしてしし詠のさんにも君を新まりな

母乃をたりまゐ面新なほ城男なほふ心ちし侍

て

藤原秀茂

今はさて尽し面新の更ならを身なほふ物とかりなる

なまく事侍ける比讀侍ける

近衛開白前左大臣

時これは男ともたるれぬ面新のまてなほこうたれ

浄土寺入居お右大臣かくれ侍て後よめる

お大僧正公豪

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

鴨長明

をとらぬつ升(ひ)のもとゝ代いつゝそ聖へは一夜を明ぬらん
前坊くれさせ給しはよませ給ひ
壽成門院

寝さえし草のゆかりを踏れはむすしき聖へは秋風そ吹
春月乃哥よみ侍ひ
前原後鶴臣

ふひいつゝ春の深山乃けまそも浪まうゝ夜末時月
月あらさ夜二条殿まそ後二条院の法世れ
事を知り給しそゝ

西花門院

雲のうへとみ山の聖原は成ぬ是とむしまにはる月の新
九月十三夜にをとりをとり給ひ時ゝ所から
書けり哥
妙宗法師

あさらけさと夜の月にさそはれ恨むすしき宛にと侍ぬ
無常の心を
源高秀

行末をふふに袖のぬるゝかなつ丸(ひ)にのれぬ君芝の露
女の方まりにゝをとふらひて四種の結書し
侍ぬる時枕にさつけ侍ひ
式部卿久明親王

とはまれ也とてもふかなる物へさゝる紀枕そうも出しき
母のおひは侍りしは御所なけさすら人の許
へ申つかはしなり　後宇多院宰相典侍
志しれしなお所しうさ世の別詠によりの衣も袖ぬらせとい
君の後成運法印下り卅三年の仏事いとゝ
なみ侍とて　法印栄運
なさ法の三十あまりの三世迄とふまそ君のうさも三ヶ
枇杷の皇太后文かくれさせ給て後法帳の
うちを何となくみいれ侍まれは志ゝ世給ひ
ぬりあやめ此菓乃侍りしをみくよめる

千義云枇杷とのゝ皇太后文ゆへ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

のれしかゝ[illegible]
[illegible]
兵乳母
あやめ草[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

江侍従
千義已出
玉ぬきしあやめ乃菓ハ[illegible]
菓イ
菓ナ
[illegible]
[illegible]
等持院贈左太后[illegible]
[illegible]
けり
檀大納言義詮
あやめ草ことしハよそまとる袖にかりて[illegible]
又のとし三月つこもりの日常在光院にて
みけり　性威法師
又もこん[illegible]
大納言經伝服に侍りし又のとしゆつかはしなる
出羽弁

あしさやうまさるらん西行さへわかれし年を通はされば

返し　大納言經信

別れし年をは雲居つまと神の氷はとけはてそなる

後朱雀院かくれさせ給て後白河殿ようさ

こゑも世給て月日のゆくもしらせ給はいさりせる

は今日は七月七日と人の戸はけしことをさう勝

拾遺　上東門院　隔し　万代集十八日

とりすてもいろかれぬるをへて世をしひうみ山七夕の系

後撰　女御　生子

詞はしられて返りのつくりをおくる

逢の江乃うをを見くらみ給ける

あらき世のなかしも今し經の江の松乃煙となるそ出しき

あにをおくれてなけきなる法を給ふるむきめ

乃もとへつりしをる　祝部成仲

りろいもはこしまし物をしそのの山文をふ人をさすりせハ

返し　女

君をしめいとく命はおしさかれかりうさめをみせしをしへハ

久安百首哥に　前參議教長

物の面ようつる玉乃緒もなく濁りをしらの物とやいふら

もまりゆて行方わしのなかは佛事いとなこ

おさふねの
勝間之江なる
おさふねの
よようき
うき舟の世をうらみてや
返し
うつとせいむ
おさ舟の
てでみ
前中納言雅俊

はる人をつらしと
うらまれも
なく事
日数
袖の
あの
たつらす

山階親源信

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

なけくらんなどそうすくまかくもらしきわくさの紅
遊し　中納言為教
書なりけり山水美れ紅なくはしてまそ山をふ歌さなるなり
正三位成國　勇まりわ侍しはよこ侍なり
　　抗邦成光
こそもなく明りの世なるかわまさにまとなき人のうつらさらん
法一位倫子のおりひ　ま侍なりは
　　中務卿宗尊親王
秋後撰雜下已下　後一条入道お冥白左大臣
もつれくもられをうこことなくさめて力にはしれ物ハ海なりなり
後今拝流なれ世拝ふて法れ惱のなられれ

文を以流して　順徳流御製
石もけまこれたりきりけるみよにしてやる世の紅とさ居なん
なすし此歌の此月を以流してよる世拝ふ
まる
なすし世の別ハなをそ無えるそ此月のよそれ拝ん
義稱門流なれ世拝なり此義道の所とも
ま草津と云所ましまあはく漕出をる嶼の
それなしき法の言ありしまりしくてよみ
侍なり　淳信朝臣
朝臣をこれ（満拝言）ゆく紅ま消る法のあれまことに其ま世にあり

853
166

3237

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用